

産地のうた 酪農王国が届ける良質の牛乳(浜中町)



年間9万tを超える生乳が生産される浜中町。その乳質の良さからアイスクリームやチーズなど、高品質な乳製品の原料に使われている。近年では、放牧酪農や後継者対策にも力を入れ、将来にわたり安定して生乳を生産できる仕組みを整えている。

ラムサール条約登録湿地の霧多布湿原をかかえる道東の浜中町は、広大な草地と冷涼な気候を生かした酪農を基幹産業にしてきた町である。JR花咲線の茶内駅の近くにある、タカナシ乳業北海道工場（写真右下）には、町内や周辺の町で生産された生乳が次々に運び込まれる。

1日の集乳量は650t。このうち1割ほどは冷却して本州の工場に送り、殺菌されパック詰めして飲用牛乳になる。同工場の主要製品は、バターや脱脂粉乳、チーズなど6品目。高級品で有名なハーゲンダッツのアイスクリームのほぼ全部に、ここで製造したクリームと脱脂濃縮乳が使われている。



「浜中地区の生乳は、衛生面のバロメーターになる生菌数が少なく、高いレベルに達しています。高温で殺菌しなくてすむ生乳を使っているから風味がよく、取引先からの評価も高いんですよ」と、笑顔で話すのは工場長の齊藤博昭さん（45）だ。

この工場で作られる製品は、生乳の味がしっかりした原料乳を使っているのだから、品質のいいものができる。

「世界中のハーゲンダッツのアイスなかで、日本のものが乳味が強くて一番おいしい」と、齊藤さんが太鼓判を押す。

町内の7戸で生産される、えりすぐりの生乳で作る「北海道4・0牛乳」は、販売開始から30年近いロングラン商品で、ホテルや高級食材店などから人気が高い。中元や歳暮シーズンに製造・販売される「北海道カルピス」にも、浜中の生乳が使われてきた。

健全な土から得られる牧草を食べたウシたちと酪農家の努力の結晶が同社の乳製品を支えている。

ミネラルの豊富な草が良質な生乳を生む

60haの草地で70頭の乳牛（うち経産牛は45頭）を飼う大友誠さん（60）の牧場（写真左下）を訪ねると、夕方の搾乳が始まっていた。

牛舎には、体がよく締まった、見るからに健康そうな乳牛が並んでいる。夏場は昼夜放牧しており、毎日しっかり草を食べてくるそうだ。妻の敏子さん（59）、新規就農めざして研修中の新一郎さん（40）とともに、タオルで乳房をきれいに拭き取り、手際よく搾乳作業を進めていく。

農業は誠さんで3代目。自給自足の暮らしを経て、昭和9年に乳牛1頭の導入から酪農を始めた。

右肩上がりに規模拡大を進め、15年ほど前には現在の倍近い頭数まで増やした。しかし、今後も投資を増やしていけば資金的に厳しくなると判断し、悩んだ末、ウシの数を減らし、経営の中身を充実させる道を選んだ。

「草地には、EM菌を活用してつくった発酵堆肥を散布するようにしています。土壌分析をきちんとやり、必要に応じて化学肥料や微量元素を散布します。そうすることでウシが健康になりましたね。ミネラルバ

ランスの整った草を食べるウシからできるミルクは、とても健康的ですよ」

と、自信を強める大友さん。輸入飼料はあまり使いたくなかったので、濃厚飼料の給与量も減らしてきた。

長男の孝一さん（31）は、大友さんが搾った生乳を原料にしたチーズ作りにも励む毎日を送る。10年前に、国産ナチュラルチーズ製造の草分けである、せたな町の「こんどうチーズ牧場」で修業を積み、平成11年には牧場内に大友チーズ工房を設立した。「オールジャパンナチュラルチーズコンテスト」で連続4回、優秀賞を受賞するなど、若手のチーズ職人として周囲の期待を集めている。

牧場で生産される生乳の3割に当たる、年間120tをチーズに加工する。4年前には直売店も開設した（写真右）。

「嗜好品なので、作ることよりも買ってもらうほうが大変なんです。『最近、食卓にチーズがならぶ機会が増えた』と言われると、うれしくなりますね」

と、売り場を切り盛りする妻の華苗さん（33）が声を弾ませる。

5年前に孝一さんと結婚し、OLから未知のチーズ工房の仕事へと転身。チーズ部門だけで生活できるように販路を拡大し、工房も増築した。

「酪農家の後継ぎでも加工の道が開けるといいうモデルを示したい」

と、華苗さんがと張りきる。

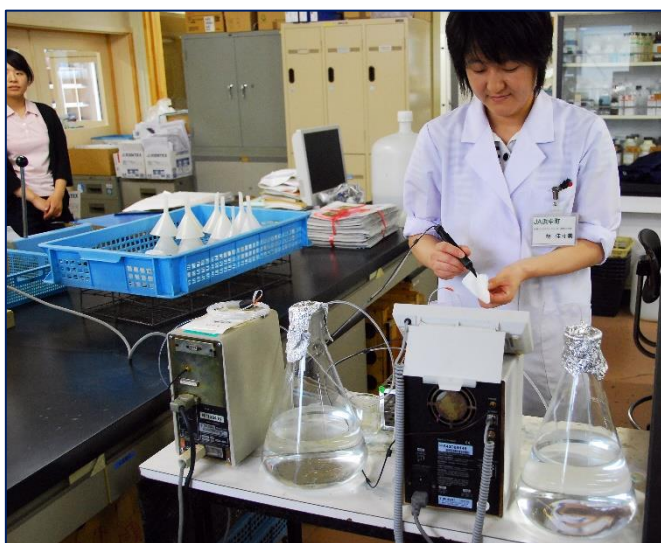


大友牧場の挑戦は少しずつ軌道に乗ろうとしている。

放牧経営の推進で外部依存からの脱却を

浜中町が、年間の生乳生産量9万4,000tを超える、品質のよい原料乳の一大産地に発展した背景には、JA浜中町による先進的な取り組みがあった。

雪印乳業の茶内工場（現在はタカナシ乳業北海道工場として操業）が閉鎖された昭和56年、単独の農協としては全国で初めて、「酪農技術センター」を設立し、良質な草づくりに欠かせない土壌分析をはじめ、飼料や生乳の分析を定期的実施してきた（写真下）。



牛海綿状脳症（BSE）問題をふまえ、平成14年にはウシの耳標をベースに牛乳全体の流れを追跡できる、独自の「酪農情報システム」も確立している。

酪農を志す人たちの受け入れにも積極的で、これまでに全国各地から25組が就農を実現した。平成3年には、町とJAが費用を折半して、新規就農者の研修牧場をオープンさせており、現在は7組が研修を積み重ねている。

一方で、パイオニア的な事業を続けてきた浜中町の酪農もまた、資材費の高騰や担い手不足などの課題をかかえる。

JA浜中町では、昨年度の事業計画に「放牧経営の推進」を明記した。

『草地を生かし、この地でどう生きていくか』を議論し、推進方針を盛り込みました。飼料や肥料などの外部依存を少なくして、地域のなかで完結できるシステムをつくっていかないと、酪農専業地帯として持続できません。少しずつ放牧を推進していきたい』

と、JAの高橋勇参事（48）が計画のねらいを説明する。

すでにニュージーランドに職員を派遣して放牧に適したウシへの改良や、高栄養の牧草作りなどの研究に着手しており、今後は各種事業を使って牧区や牧道の整備を進めていく。

株式会社を立ち上げ新規参入を促す

浜中町には後継者のいない酪農家が20戸ほどあるという。今後、離農が進んで農地の引き受け手がなくなると、地域社会が崩壊するおそれもある。

そこで今年7月、JAと町内外の10企業が資本金を出し合い、就農者の受け皿となる「酪農王国」を設立した。

JAの「育成牧場あねべつ姉別団地」の用地390haを使い、経産牛360頭、育成牛280頭ほどを飼育する。そして、生乳生産や乳・肉用牛の飼育販売、作業の受託などに取り組んでいく。社長にはJAの石

しげのり
橋榮紀代表理事組合長（69）が就任し、来春から施設の整備や牧草の収穫を進めて、来年11月からの生乳生産をめざす計画だ。

異業種の人たちが、そこでトレーニングを重ねて畜産のノウハウを身に付け、離農跡地などへ就農していく—そんな新しい担い手づくりの場を模索する。

「大型法人が辞めた農家の土地を引き受けると生産の維持はできますが、農業にかかわる人が増えなければ地域社会は成り立ちません。『酪農をやりたい』という思いがあれば、異業種の人も参入できる仕組みをつくりたい。ウシを理解してきちんと対応できるかどうか、事業の成否のカギを握るので、人員配置を考えながら取り組みます」

と、高橋参事が力を込めた。

消費者のもとに良質の牛乳や乳製品を届けるために、先人の努力でつくり上げた生産基盤を守り育てようと、地域を挙げた取り組みが進んでいる。

環境を保全する酪農家の植樹活動

浜中緑の回廊推進委員会

100頭余りの乳牛を飼うかたわら、「浜中緑の回廊推進委員会」の委員長を務める二瓶昭さん（59・写真右）。湿地や傾斜地、草地や川の近くなどに木を植え、生き物が往来する「回廊」となる樹林帯を再生し、豊かな自然環境をつくろうと奔走している。

きっかけは10年ほど前に観たテレビ番組。コウノトリを守ろうと、ドイツの小さな村の酪農家たちが活動していた姿を目にしたことだった。酪農を営むなかで、草地造成によって自然の生態系を壊しているのではないかと、つねづね考えていた二瓶さんは、番組の中の「人の暮らしも自然の一つ」という言葉に、大地を守る酪農の原点を思い起こした。

地元の茶内第3酪農振興会に植林の必要性を呼びかけ、仲間を募った。平成13年には、国や道の「無立木地等森林緊急造成事業」を活用して植樹活動をスタート。森林組合から3万4,000本の苗木の提供を受け、酪農家の所有地およそ12.6haにトドマツやヤチダモ、ミズナラ、シラカバなどを植え始めた。

この活動をベースに全町的な森づくりの機運が高まり、19年には「浜中緑の回廊推進委員会」が誕生。



農地などの一部を「回廊用地」として、今では酪農家 97 戸と J A と木材加工業者の 2 団体が 2,088ha の土地を登録している。

昨年秋、「NPO 法人霧多布湿原トラスト」などと協力し、町上水道の水源地になっている三郎川に魚道を設置した。魚の遡上を助け、タンチョウなどが上流部で餌を取りやすくするためだ。苗木作りを通じた浜中漁協女性部との交流も 10 年近く続く。

「植樹を通じて、安全な牛乳を生産する我々の思いが消費者に伝わるといいですね。長い年月をかけて、植樹活動を続けていきます」

産地のデータ

浜中町内には 1 万 5,000ha の農地に、人口の倍以上に当たる 2 万 3,000 頭ほどの乳牛が飼養されている。JA 浜中町管内の酪農家数は 196 戸で、町内 9 地区で浜中町酪農振興会連合会（高岡透会長）を組織する。平成 20 年度の生乳販売は 9 万 4,621t で 73 億 800 万円（補給金を含む）。個体販売を含めた畜産販売高は約 85 億 8,000 万円。

問い合わせ:JA 浜中町酪農技術センター

厚岸郡浜中町茶内栄 5 番地 ☎0153-65-2141